

中国における「村上春樹熱」とは何であったのか
～2008年・3000人の中国人学生への調査から～

王 海 藍*

The meaning of "Murakami fever" in China
～ by a questionnaire survey involving 3000 university students of China in 2008 ～

Hailan WANG

抄録

34の作品が中国語に翻訳されている村上春樹は、中国で人気を博しており、何年もの間中国の若者の間で「村上春樹熱」が続いている。筆者は、その中国における「村上春樹熱」がいったい何であったのかを解明するために、2008年に中国の学生約3000名を対象にしてアンケート調査を実施した。調査結果から判明したのは、中国の「村上春樹熱」が実は『ノルウェイの森』ブームであったということである。本論の目的は、アンケート調査のデータと『ノルウェイの森』というテキストを分析した上で、調査結果から判明したことを論じたものである。本論の構成は、まず中国で早くから翻訳されブームになった『ノルウェイの森』がどれほど中国の学生に読まれてきたかを調査データから明らかにし、次に筆者は今回の調査で90%の学生が読んだことがあると答えている『ノルウェイの森』から、中国の学生たちが「孤独感と喪失感」及び「性描写」、「デタッチメント」を受け取っていると分析した。そして最後に、村上春樹と『ノルウェイの森』が中国の若者の実生活や文芸界に影響を与えていることについて分析し、今後も中国では『ノルウェイの森』ブームがしばらく続くのではないかと予測する。

Abstract

With 34 of his works being translated into Chinese, Haruki Murakami became very popular in China, and "Murakami fever" lasted out among Chinese young peoples for years. In order to elucidate the meaning of "Murakami fever", a questionnaire survey involving 3000 university students of China, was carried out in 2008. The results of the questionnaire survey show that the so-called "Murakami fever" in China is actually the boom of "Norwegian wood". The purpose of this paper is to derive the above-mentioned conclusion by analyzing the data of the questionnaire survey and the text of "Norwegian wood", Murakami's famous novel. This paper is structured as follows. Firstly, we found that there were the boom of translation and publication about "Norwegian Wood" in China, so students increase opportunities to read "Norwegian Wood". Secondly, according to the questionnaire data, the most likely descriptions of "Norwegian Wood" given by the surveyed students, such as "loneliness and failure", "sexual description" and "detachment", are discussed. At last, the effects of "Norwegian Wood" on Chinese young peoples and literary world were analyzed, and it is reminded that the boom of "Norwegian Wood" will be continued presently in China.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral Program
Graduate School of Library, Information and Media studies, University
of Tsukuba

はじめに

村上春樹の作品は、『世界は村上春樹をどう読むか』¹によれば、世界の40カ国近くで翻訳出版されている。また、2006年に村上春樹がドイツのフランツ・カフカ文学賞を受賞し、同じ年にノーベル文学賞の候補としてノミネートされたというのは、彼の文学がいかに世界中で読まれているかの一つの証左であった。このことは、村上春樹がノーベル文学賞作家川端康成、大江健三郎らと並んで世界でよく知られた現代日本の作家であるということの意味する。世界において村上春樹文学が多くの人々に受容されているという事実は、中国においても例外ではない。4、5年前のことになるが、中国における「村上春樹熱」のことが日本の各種マスコミで頻りに報道されるということがあった。例えば、『読売新聞』（2004年11月20日号）は、「中国で村上春樹が爆発的人気、経済成長が背景」という見出しで中国における村上春樹現象を紹介していた。「Yahoo 辞書」の「村上春樹熱」の項にも、「日本でも人気の作家・村上春樹の作品が、中国で爆発的な人気を集めていること」²と、書かれている。

本論文は、中国における「村上春樹熱」の実態がどんなものであったのか、若者を中心とする読者は村上春樹の文学をどのように意識しているのか、言い換えれば村上春樹の文学は中国においてどのように受け入れられているのか、というような点に関して、筆者が2008年5月から6月の1ヶ月間に、中国全土の11都市³にある大学22校⁴を訪問して行ったアンケート調査を基に明らかにしようとするものである。この調査は、日本からあらかじめ連絡しておいた大学の学務事務担当者や教員に手伝ってもらい、授業中あるいは授業終了直後に調査用紙を配り、アンケートに答えて貰ったものである。調査対象は、大学生を中心に、修士・博士・在学している社会人も含め、合計3000名の学生であった。

今回の調査結果、3000人のうち有効回答者は2618人で、そのうち「村上春樹の名前を聞いたことがある」と答えた人は2365名に達し、有効回答者の90パーセントを占めている。また、「村上春樹の作品を読んだことがある」と答えた人は1475名で、「読んだことがない」と答えた人は890名、二者の百分比率は62:38になり、ほぼ5人のうちの3人が「村上春樹の作品を読んだことがある」という結果となった。このことを見れば、若者(学生)を中心とした「村上春樹熱」は確かに存在した、と言っているだろう。ただ、中国の大陸に流通している村上春樹作品は34作に上るにもかかわらず、よく読まれ

ている作品の数は限られている。調査結果(巻末のa-図1参照)によれば、「村上春樹の作品を読んだことがある」1475人中の90パーセント(1325人)が『ノルウェイの森』を読んだ作品として挙げ、約30パーセント(432人)の人が『海辺のカフカ』を二番目として挙げ、約25パーセント(378人)の人が『風の歌を聴け』を三番目に挙げている。また、517人(3分の1強)が『ノルウェイの森』しか読まなかったという結果も出ている。そして、「最も印象を残している作品はどれか」という質問で、「村上春樹の作品を読んだことがある」1475人のうち、『ノルウェイの森』を選んだ人は1076人で、70パーセント強になることも分かった。

このような調査結果から判明するのは、中国の「村上春樹熱」が実は『ノルウェイの森』ブームであったということである。このことは、今回の調査における「村上春樹」に関する質問項目の「答え」の大部分が、『ノルウェイの森』から感じとったものに依拠したことを意味するのではないかと推測することが可能である。

1. 『ノルウェイの森』出版ブーム

『ノルウェイの森』は、村上春樹がビートルズのヒットナンバー「Norwegian Wood」(1965年に発売されたアルバム「ラバー・ソウル」に初めて収録される)にヒントを得て、1983年に書いた短編小説『螢』を基にして書かれた長編小説である。日本では1987年9月に講談社から、パステルカラーの赤と緑を使うという意表をつく著者自身の装幀によって、上下巻同時に書き下ろしで刊行された。帯には、「激しくて、物静かで、哀しい、100パーセントの恋愛小説です」と書かれていた。1987年9月28日付けの『朝日新聞』(12面文化欄)には、「個の死から時代を描く」という見出しで『ノルウェイの森』の紹介が載った。そこでは、「60年代から80年代にかけての日本の社会における『個人』のたたずまいが、独特の終末観を漂わせる文体で描かれていた」と高く評価されていた。『ノルウェイの森』は、発売から今日までの21年間で国内の発行総累計部数が870万部(版元発表)となり、大ベストセラー・ロングセラー作品になっている。

ところで、中国大陸に『ノルウェイの森』が初めて紹介されたのは、日本での刊行から2年後の1989年であった。当時暨南大学(Jinan University)日本語系の教師をしていた林少華⁵が翻訳を担当し、中国の桂林にある漓江出版社から刊行された。林少華が書いた「私と『ノルウェイの森』」⁶によると、1989年の漓江版『ノル

『ノルウェイの森』は、表紙の装幀デザインが中年女性の裸の背中と、女の腰まで落ちた和服という扇情的なものであった、という。訳文の中身についても、当時の編集者の意見によって、目次に「月夜の裸女」「同性愛の禍」などの小標題が付けられ、ポルノ小説のような雰囲気強く打ち出すものになっていたともいう。しかも、1989年刊行の瀋江版は、当時の当局（新聞出版署）の規制を考慮して、原作にある多くの性描写場面が省略されたり削除されたりして刊行された。林少華のブログに書かれた『『ノルウェイの森』：20歳と18歳』⁷によると、1989年の瀋江版は初刷が3万冊で、1993年までに四刷を数え10万冊発売されたという。そして、1996年に『ノルウェイの森』は瀋江出版社によって改めて著作権が取得され、「村上春樹精選集」（5巻）の一巻として1万5000冊刊行された。また、1998年には瀋江出版社からの改版が表紙の装幀も綺麗に変えられ、訳者である林少華による解説や作家の訪問記、作家の年譜なども付けられて刊行された。1998年の瀋江出版社版が初刷2万1000冊で、2000年9月まで10刷りを数え、総計20万冊刊行されたという。新しい瀋江出版社版（1998年版）の『ノルウェイの森』は装幀が綺麗になったということもあって、人目を引き、多くの読者に購入された。この版は、それまでに刊行された版と同じように性描写について省略・削除されたもので、現在は絶版になっているが、一般的には、『ノルウェイの森』ブームはこの時から始まったと言われている。

2001年、上海訳文出版社は、これまでに刊行された『ノルウェイの森』が多くの読者に歓迎されたことを知って、村上春樹と作品の翻訳出版に関して独占契約を結んだということもあって、前掲の訳者林少華に原作の性描写を補充して翻訳し直してもらい、さらに美しい装幀を施し、新しく全訳版『ノルウェイの森』を出版した。訳者林少華の話によると、この上海版の全訳本は2005年11月までに23刷りを数え、105万冊刊行されたという。この出版部数に関して、「10万部を売り上げれば『奇跡』といわれる中国の出版界で、村上作品の人気は伝説的だ」⁸と日本の『読売新聞』が報道した。これは、今回の調査による読者が始めて村上春樹を読んだ年別の分布状況（巻末のb-図2参照）と合わせてみると、2003年から2006年までの4年間に村上春樹作品（多くの場合は『ノルウェイの森』を指す）がよく読まれているという結果と合致する。そして、2007年は『ノルウェイの森』刊行20周年にあたったが、上海訳文出版社は『ノルウェイの森』の限定記念版を1万冊刊行した。

なお、大陸⁹では、WTOに加盟するまで、著作権や版

権など私的所有権について十分に配慮がされなかったもので、『ノルウェイの森』は林少華が訳した瀋江出版社版と上海訳文出版社版以外にも、多くの版（香港や台湾などのものを含め）が流通してきた。著者が調べた限りでは、『ノルウェイの森』の大陸における流通は、巻末の「c-表1」の通りになっている。東京大学の中国文学研究者藤井省三は、中国では『ノルウェイの森』が大陸の林少華訳と香港の葉蕙訳と台湾の頼明珠訳という3種類の版になったとして、「このように1冊の外国文学がほぼ同時に同じ言語に数多くの訳者により翻訳されてそれぞれベストセラーとなるという現象は、世界にも珍しいのではあるまいか」と感嘆したが、中国語版『ノルウェイの森』は実際21種類の版がある。

では、中国の読者は上記のような数多くの中国語版『ノルウェイの森』をどのような方法で読んだのだろうか。今回の調査におけるこの質問に対する答えは、複数回答の結果であるが、「図書館から借りた」と「他人から借りた」が共に1位で各592人、それぞれ村上春樹作品を読んだ人数の40パーセントに当たる。筆者が2008年8月から9月にかけてインターネットで中国大陸全土の204の公共・大学図書館を検索してみたところ、195館に1種類以上の版の異なる『ノルウェイの森』が収蔵されていること（95.6パーセントの収蔵率）が判明した。村上春樹のほかの作品の訳本は、『ノルウェイの森』と比べるとその収蔵率において大きな差がある。近年、中国では高度経済成長政策が成功して「豊か」になり、その結果全国各地の図書館が多くの新刊書を収蔵するようになり、若者が『ノルウェイの森』などの本を手取るのに有利な条件が作り出されるようになった。前掲の40パーセントの読者が『ノルウェイの森』を「図書館から借りた」と答えたのも、その意味では納得できる。また、40パーセントの読者が「他人から借りた」と答えたことも、ある程度豊かになった中国社会に個人的な蔵書が増えたことを意味し、高度経済成長が『ノルウェイの森』ブーム形成の大きな要因になった、とも考えられる。

2. 学生を中心とした若者による読まれ方

村上春樹の『ノルウェイの森』は、一人称の「僕」である主人公の「ワタナベ」（37才）が、1987年にハンブルグ空港に着陸する際に、ビートルズの「ノルウェイの森」を聴いたことで、心を病んで自殺した直子のことを思い出し、18年前の出来事へと記憶が遡るという筋書きを持った作品である。作品中の直子は、元々「僕」の高校時代の友人であったキズキの恋人で、直子とキズキは

「僕」と三人だけの小世界で楽しい時間を過ごす、やがてキズキが自宅のガレージの中で自殺(自殺の理由は不明)してしまったことから3人の関係は壊れ、キズキの葬儀の後「僕」と直子は会わなくなる。その1年後、東京の大学生になっていた「僕」は電車の中で直子に偶然再会し、それから二人はほとんど毎週会うようになり、「魂を癒すための宗教儀式みたい」に東京の町をひたすら歩いたりすることで、お互いに必要な人間だという気持ちを持っていく。直子は20才の誕生日の夜、「僕」と初めてセックスするが、翌日直子は「僕」のまえから姿を消してしまう。その頃は学生運動が盛んで、大学が封鎖されて講義がなかったということもあって、「僕」は運送屋のバイトなどを行って、直子を失って心の中に生じた空洞を意識しないような生活を送っていた。数ヶ月後、「僕」は直子から手紙をもらい、彼女が京都にある精神病院に入院して療養していることを知る。「僕」はすぐにそこへ見舞いに行き直子に会うが、その時再会した彼女が成熟した女性の魅力に溢れていたので、「僕」は以前より更に心を引き付けられることになる。その夜二人は同じ部屋に寝るが、「僕」は自分の感情と性欲を抑え、病院を去る際にいつまでも彼女を待っていると約束する。しかし「僕」は、大学に戻ってほどなく、以前に学校の近くのレストランで偶然出会った緑という同じ学部の女の子と付き合い始める。「僕」は、療養中の清らかで純な直子を忘れることができず、また直子の病状を心配しながら、青春の只中であって澁刺とした魅力を持つ大胆な緑にも惹かれる。

「僕」は、この複雑な関係に戸惑い悩むが、やがて直子が調子を崩して転院し自殺したという訃報が伝えられ、「僕」は魂を引き千切られたような思いに陥り、全国のあちこちを歩き回って直子を永久に失った心の「傷」を癒そうとする。最後に、東京に戻った「僕」は、直子の入院中に知り合った友人であり、ベートルズの「ノルウェイの森」をピアノで弾ける中年のレイコによって癒してもらおうと、その夜彼女と何回もセックスするが、それでも十分に癒されることがなかった。小説のラストシーンは、直子を失って途方に暮れ、精神的に追い詰められた「僕」が緑に助けを求める場面になっている。

僕は緑の電話をかけ、君とどうしても話がしたいんだ。話すことがいっぱいある。(中略)

緑は長いあいだ電話の向こうで黙っていた。(中略) やがて緑が口を開いた。「あなた、今どこにいるの?」と彼女は静かな声で言った。

僕は今どこにいるのだ?

僕は受話器を持ったまま顔を上げ、電話ボックスのまわりをぐるりと見まわしてみた。僕は今どこにいるのだ?(中略)僕はどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた。¹⁰ (傍点原文)

この作品には、ワタナベ、直子、緑、レイコ以外に、傲慢で頭のよい永沢と慎み深く古風でありながら後に自殺する永沢の恋人ハツミなどの人物も登場する。社会学者の桜井哲夫は、「この小説を一言で定義づけしてしまうなら、サイコセラピー(精神療法)ないしカウンセリングの文学だということになる。」¹¹と述べているが、『ノルウェイの森』が多くの読者を得たということは、桜井哲夫のいうようにこの小説の多くの読者がこの小説を読んで心を癒した、ということになるのかもしれない。

今回の調査で、前掲のような『ノルウェイの森』を中心とした学生読者に対して、「村上春樹の作品にどんな印象を持ちましたか(複数回答可)」という質問を行ったが、答えはd-図3(巻末参照)に示すようになった。回答結果において「孤独と喪失感に満ちている」が78パーセントと最も多く、「大量な性描写がある」が35パーセント、「社会システムや共同体を冷ややかに傍観している」が31パーセントと続いている。

1) 「孤独感」と「喪失感」

d-図3からも分かるように、第1位は、「孤独感」と「喪失感」を感じる、というものであった。『ノルウェイの森』の直子は、優しい姉も幼馴染で恋人のキズキも相次いで17才の時に自殺してしまったので、21歳まで生きてきた自分の人生について切なく思っており、一番好きな曲である「ノルウェイの森」を聴くと、「ときどきすごく哀しくなることがある。(中略)自分が深い森の中で迷っているような気になるの。(中略)一人ぼっちで寒くて、そして暗くて、誰も助けに来てなくて。」というような気持ちになる、と「僕」に告白している。¹²「僕」は、ずっと直子を愛していたので、直子を助けようとする強い気持ちを持っていたが、直子は京都の精神病院に入院中であり、「僕」も東京の大学に通っているということがあって、「僕」は孤独な日曜日を何度も何度も経験することになり、直子を愛していながらも明るい緑へ気持ちが傾きがちになっていた。しかし、直子は病院で自殺する。そのことを知った「僕」は、先にも記したように全国を放浪することで自分を立て直そうとするが、そんな「僕」の「孤独感・喪失感」、あるいは「苦しみ」は、物語の最後で電話ボックスの中から緑に向かって「僕は今どこにいるのだ?」(傍点原文)と叫

ぶところによく現れている。

また、レイコの場合も、若い女の子の同性愛に翻弄され、自殺を試みるが未遂に終わり、その後離婚して七年間も精神病院で療養するという事になったのは、彼女もまた深い「喪失感」と「孤独感」を抱いていたからに他ならなかった。レイコは、療養仲間であった直子が自殺した後、「孤独感」と「喪失感」を抱いたまま一人で生きていく決意を固め、旭川に行くことになる。作品の中で唯一元気な緑さえ、家族（父親）が入院して一日中家の中にいて「僕」からの電話を待っていたときには、「一人きりでいるとね、体が少しずつ腐っていくような気がするのよ。だんだん腐って溶けて最後には緑色のとろとした液体だけになってね、地底に吸いこまれていくの」と言っており、そこには強い「孤独感」が漂っていた。

このような『ノルウェイの森』の「孤独感・喪失感」を中国の若者は、どのように受け止めていたのか。先の調査結果によれば、「中国で村上春樹熱が起きている理由は何だと思えますか（複数回答可）」という質問に対して、最も多い63パーセントの人が「中国の経済と社会の発展に伴い、若者の心理も変化し、村上春樹作品に共鳴しているから」という選択肢を選んだ。ここにある「共鳴」は、もちろん「喪失感・孤独感」についてである。中国は、1978年以来「改革開放政策」を推し進めることによって、市場経済に弾みをつけ、特に90年代以降、その勢いは止まるところを知らず、中国社会に大激変をもたらした。若者を含む人々は誰もが「豊かな生活」を目指すようになったと言っても過言ではない。しかし、その一方で、若者は激しい競争を強いられる進学や仕事からの重圧、さらには複雑な人間関係などがもたらすストレスなどもあって、人生に対して積極的に取り組むことができないという現象も現れるようになってきた。

前掲の林少華は同じ論文の中で、調査によって明らかにされたような「孤独や寂寥感への共鳴」は、「1人っ子政策」で育った若者の特徴だと指摘しているが、筆者もその考えに同意する。何故なら、「1人っ子政策」というのは、結果的に両親とそれぞれの祖父母の計6人の大人が1人の子供を育てることを意味し、わがままな子供、中国語で言う「小皇帝」が社会的に増え、彼らは成長しても無責任、拝金主義、自己中心主義的な大人になりがちであり、自分の思い通りにならないと「孤独感」や「空虚感（喪失感）」を抱きやすくなる、と筆者は考えているからである。なお、中国の『新京報』（2006年12月12日号）によると、中国共産主義青年団（共青団）

北京市委員会は「首都大学生発展報告」を発表し、北京市内の大学生の鬱病発症率が23.66パーセントに上ったことを報告している。報告は、主な要因として「1人っ子」の精神的弱さを挙げる一方、就労問題が最大のストレスになっていると指摘しており、深刻化する就職難が大きく影響していることを浮き彫りにした。これによっても、「村上作品の孤独や寂寥感への共鳴」は「1人っ子政策」と深い関係のあることがわかる。

さらにまた、中国の学生を中心とする若者が抱えている「喪失感・孤独感」を「都市文学」という観点から考えた場合、高度経済成長に成功して「豊か」になった中国において、そのような「豊かさ」を象徴する都市に生活する人々の内面に注目した「都市文学」の作品が、「村上春樹熱」が始まるまでには少なかったもので、村上春樹文学のような「喪失感」や「孤独感」を描いた「都市文学」が珍しく、若者たちから歓迎されることになった、という側面があるということである。冒頭に記した2006年の「世界は村上春樹をどう読むか」というシンポジウムに出席した香港の学者梁秉鈞（リャン・ピンクワン）は、「今の中国では次々と優れた文学作品が生み出されていますが、それらは特に中国の農村や郊外地域を舞台にしたもので、人々が文化大革命でどのような経験してきたか、そして現在どのような苦勞を強いられているかを描いたものが多く、都市生活を描いた文学にはなかなかよい作品がありません」¹³と指摘している。

2) 「性描写」

『ノルウェイの森』の中にはセックスを描いた場面（男女の関係、同性愛、自慰、性の幻覚、性の話題、など）が全部で約28箇所存在する。

実情については定かでないが、現代の日本はセックス産業が盛んで、援助交際や売春などが日常的に行われていると言われている。日本の文学作品や漫画に性描写が頻繁に登場するのも、そのような社会を反映したものと考えられる。しかし、考えてみれば、性（セックス）というのは、孤立している個体と個体が本能的に繋がりたいとする行為によって成立するもので、そのことを前提として了承すれば、性（セックス）においては「肉体関係」だけではなく、「精神的な繋がり」も重要視しなければならない。以上のことをふまえて『ノルウェイの森』の性描写について分析すれば、作者の村上春樹は登場人物の根源的な心理や運命、人と人の微妙な関係などを描くために多くの性描写場面を取り入れたのであって、単に「性の自由化」に便乗してそれらを取り入れたのではない、と考えられる。例えば、直子の場合、成長期

に姉と恋人の自殺を経験することによって心の底に二重の傷を負うことになり、精神的にも追い詰められ孤独感を抱くようになるが、亡くなった恋人の友人であった「僕」に偶然再会し、彼の好意と優しさを心の支えに生き続けることができるようになる。そして、20歳の誕生日に初めて「僕」とセックスするが、それは直子の初体験で、「僕」はなぜキズキと寝なかったのかと直子に聞くが、直子は声もなく泣くばかり、という場面になる。そこで、直子は幼馴染であり愛していた恋人が一度も自分の体を入ったことがないことに気づき、そのことで悲しみ、また罪障感も抱き、それ故に「僕」とセックスした翌日に「僕」の前から姿を消してしまうのである。ここでは性(セックス)を媒介に、いかに直子が精神的に苦しんでいたかが描かれている、と考えられる。

ところが、直子は入院した精神病院で友達になったレイコに、自分と「僕」とのセックス体験を繰り返し嬉しそうに話しながら、内心では「ただもう誰にも私の中に入ってほしくないだけなの。もう誰にも乱されたくないだけなの」¹⁴とも言っていて、彼女が「性」に関してアンビバレンス(精神的に不安定)な状態にあったことが書かれている。最終的には、直子は「僕」との関係(セックスも含む)では救われず、姉やキズキと同じように自殺してしまう。またもう1つ、小説の最後の方に「僕」とレイコとのセックス場面が出てくるが、それも単なる「欲求のはけ口」としての肉体関係ではなく、作品中に「かつて僕と直子がキズキという死者を共有していたように、今僕とレイコさんは直子という死者を共有しているのだ」書かれているように、精神的なことが性(セックス)に深く関係していることが示唆されている。つまり、『ノルウェイの森』における性描写には「精神的」な側面が強いということである。

前記したように、この小説の性描写は多くの中国人の若者を引きつけた。もちろん、中国の若者が具体的にはどのような性描写にひきつけられたか、それぞれ「性」に対する考えかたが違うと思うので、十分にそのことを理解することはできない。しかし、今回の調査によって35パーセントの読者が作品の性描写に関心を持ったこと、これは中国社会が「改革開放」によって国際経済とも深く関係するようになり、それとともに西洋の文化や価値観が浸透し、その結果中国人の性観念にも変化もたらされたことを反映するものであった、ということである。特に90年代に入ると、同棲、離婚、不倫、売春、ポルノといった言葉に象徴される現象(風俗)が中国社会に現れるようになり、かつては「タブー」とされていた性(セックス)に関する話題も日常的に話されるよう

になった、ということがある。

これについて、名古屋商科大学の王輝は「改革開放以降の中国人の性意識の変容およびその形成要因についての考察」¹⁵という論文の中で、「婚前の性行為に対して、開放的な態度を取る人の割合は80パーセント近くになる」、「現在の21歳の若い人の中で、79パーセントが婚前性行為の経験があって、農村地区においてはこの割合が80パーセントを上回って、婚前性行為は低年齢化した」と書いていた。しかし、中国政府は過激で露骨な性描写が存在する中国の文学書籍に対してよく発売禁止の処置をとっており、性描写が描かれた書籍は少ない。それゆえ、中国政府に認められる村上春樹の『ノルウェイの森』における性描写が、多くの若者に注目され、読まれるようになったことも考えられる。先の調査結果において、初めて村上春樹の作品を読んだ読者の平均年齢が17.3歳であることは、この中国の実情(婚前性行為の低年齢化)を反映しているとも考えられる。

3) 「デタッチメント」

調査によれば、読者は村上春樹の作品に「社会システムや共同体を冷ややかに傍観している」という印象を持っている(約31パーセント)。つまり、村上春樹の文学が「デタッチメント」を一つの特徴にしていることを、中国の読者は読み取っていたのである。この「デタッチメント」に関して、村上春樹は心理学者河合隼雄との対談『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』¹⁶の中で、次のように書いている。

僕が小説家になって最初のうち、デタッチメント的なものに主に目を向けていたのは、単純に「コミュニケーションの不在」みたいな文脈での「コミットメントの不在」を描こうとしていたのではなくて、個人的なデタッチメントの側面をどんどん追求していくことによって、いろんな外部の価値(それは多くの部分で一般的に「小説的価値」と考えられているものでもあったわけだけれど)を取り払って、それでいま自分の立っている場所を、僕なりに明確にしていこうというようなつもりがあったのだという気がします。(傍点原文)

ここで語られている「デタッチメント」は、『ノルウェイの森』の登場人物が時代の価値観や社会の成り行きに迎合することなく、周りの出来事に無関心という特徴と関係がある。主人公「僕」の場合、学生運動でストを指導した学生に対して「こういう奴らがきちんと大学の単位をとって社会に出て、せっせと下劣な社会を作るんだ」¹⁷とっており、「大学解体」を叫びながら風向きを

見て大学の授業に出席するような人たちに主導された学生運動への強い反感を持っている。そういう学生運動への反発もあって、「僕」は毎日大学の講義に出てノートを取り、あいた時間には図書館に行くという生活をしていたのである。このことを踏まえるならば、主人公「僕」がいわゆる学生運動の体験から「挫折感」や「喪失感」を持つようになったとは言えないことがわかる。また、作品では主人公が社会システムとしての大学教育を嫌悪し、「僕は大学教育というのはまったく無意味だという結論に到達した。そして、僕はそれを退屈さに耐える訓練期間として捉えることに決めた」と言っている¹⁸。つまり、「僕」は社会の出来事に対して関心をほとんど持つことなく、社会のシステムなどどうでもいいと思ひ、時流に逆らう気持ちなど全くない人物として描かれている。また作品中には、「僕」と緑が午後の日だまりの中で物干し場に座ってビールを飲みながら対岸の火事を見物するシーンが出てくるが、まさに「対岸の火事」視そのもので、いかに彼らが他者に対して無関心であったかが実に生き生きと描かれていた。

また作品には、この「デタッチメント」ということに関して重要な意味を持つ永沢という人物が出てくる。彼は一生懸命勉強して外務省の試験を受け、積極的に社会に入るようにも見えながら、実際は「官僚になろうなんて人間の九五パーセントまでは屑だもんなあ」¹⁹と思うような人物で、自分が官僚の試験を受ける理由についても、「いちばんの理由は自分の能力をためしてみたいってことだよな。どうせためすんならいちばんでかい入れものの中でためしてみたいのさ。つまり国家だよ。このばかでかい官僚機構の中でどこまで自分が上にのぼれるか、どこまで自分が力を持てるかそういうのを試してみたいだよ」²⁰というように自己中心的に考えている人間である。ここから判明するのは、永沢も自分の気持ちを基準にして行動を決定し、その上で責任も背負っていくというもので、その在り方は基本的に社会に無関心な「僕」と同じである。

以上のような『ノルウェイの森』における登場人物たちの「デタッチメント」的な生き方を見ると、中国の読者が作品に現れている「デタッチメント」を感じ取ったのは、中国社会の高度（経済）発展と関係があるのではないかと考えられる。一般的には、高度経済成長政策が成功すると、それに伴って人々の生活は豊かになり、個人意識も高くなる。中国の若者も例外ではない。特に20世紀後半から21世紀にかけて、中国の経済は急速に発展し、若者の個人生活も多彩になって、楽しみと悩みを自分の空間に閉じこめて、社会に対し関心を持たない

という状態を特徴とするようになった。

3. 社会的な浸透

90年代後半以後、中国若者の生活にも文芸界にも村上春樹と『ノルウェイの森』の影響がよく見られるようになった。村上春樹と『ノルウェイの森』は中国の社会に深く浸透してきたのである。

まず中国の若者が村上春樹の作品を読むことで、作品に溢れている「孤独感」や「喪失感」を味わい、主人公の行為と世界観を模倣するという現象が現れてきた、ということがある。筆者は、日本に留学して以来五年の間に何度か帰国したが、その際市街やキャンパスで取材し、日本滞在中には、中国に居住している友達・先輩・先生・昔の同僚などを頼んで、村上春樹の影響に関する種々雑々の情報を探してもらった。その限りで言えば、中国の高校や大学に在学中の学生たちは、男子の場合女の子と出会いたいと望み、女子の場合は「直子の憂鬱」を気取ったり、自分には父母も家庭もない人間であるかのような「妄想」にふけるなどということがあった。また、少なくない学生がジャズやロック、ポップス、クラシックを好み、ブログ（BLOG）の名前に「ノルウェイの森」や「彼得猫（日本語でピーター・キャットという）」などと付けたり、村上春樹の小説の一部を取り出して座右の銘にしているような者もいた。例えば、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」²¹のような、深い哲理を含んでいると思わせる一文も使われている。サラリーマン階層のある若者は、仕事を辞めて好きな都市部に引っ越し、『風の歌を聴け』の「ジェイズバー」を模倣して喫茶店を経営するというようなことを行ったり、村上春樹の作品によく出てくるスパゲッティやサンドウィッチ、デザートなどを食べ、自分より年上の女性（『ノルウェイの森』のレイコのような存在）と付き合うというような現象も現れていた。

また、田建新によって「毎年のように村上春樹の作品と評論が紹介され、それによって、“恋愛小説”“青春小説”“都市小説”などといった概念が中国の文壇にも吹き込まれた。その反響としては、これまでの『傷痕』文学²²や『現実批判』文学に飽きた読者側にも、また中国当代文学の新しい方向を模索する作者側にも“新鮮血液”をもたらしした……」²³と書かれたように、90年代後半から若手の作家が『ノルウェイの森』を模倣した新作を次々と発表するということが現れた。北京師範大学の王志松は、『転換中の消費社会における“村上現象”—中国大陸における村上春樹文学の翻訳と受入れ」²⁴とい

う研究論文の中で、作家であり新聞記者でもある邱華棟が自分の最初の小説『夜の承諾』²⁵の主題と音楽に関して、『ノルウェイの森』から影響を受けたものであることを認めている、と書いている。さらに、『70年代後』²⁶作家の李修文は、自分のことを「中国の村上春樹」とであると公言しているが、彼の『泣きぼくろ』²⁷は、日本に滞在した経験を生かした、東京を舞台とする恋愛物語である。王志松は、この小説が“死”と“感傷”の雰囲気にも包まれていること、及び料理の詳しい作り方や「数字」が多用されていることなどから村上春樹文学の影響を強く受けている、と具体的に指摘している。

また、「中国版の『ノルウェイの森』」と呼ばれている作品は少なくない。青年作家爾雅の『蝶乱』²⁸という小説は、青春時代の成長と誘惑に関する物語で、中国の90年代の大学生活を再現するものと言われ、濃厚な「喪失感」が作品にあふれ、村上春樹の『ノルウェイの森』を思い出させるものになっている。また、『文学報』²⁹は、女性作家蘇蒼桑が書いた『千眼溫柔』³⁰について、これは愛と生命の関係を描いたものであるが、音楽やバーの取り入れ方、あるいは「孤独」、「困惑」などが作品のテーマになっている点で、村上春樹の『ノルウェイの森』に似ている、と指摘していた。

そして、『ノルウェイの森』の「続編」ということで『ノルウェイには森がない』が2004年に出版された時、中国国内は沸き返るような騒ぎになった。著者は「福原愛姫」という日本名を持つ女性作家で、村上春樹の「秘密の愛人」だと報じられたので、村上春樹の版權を独占する上海訳文出版社から村上春樹が否定の声明を出して、「福原愛姫」はでたらめな架空の作家である、と『北京娛樂信報』が報じるような事件にもなった。ただし、この「続編」は『ノルウェイの森』に登場する「ワタナベ」「緑」「レイコ」「永沢」などがそのまま出てきて、プロットは悪くないと言われている。この事件からもわかるように、『ノルウェイの森』の大きな影響を利用して、出版社の方も書き手の方も新作の宣伝手段として『ノルウェイの森』を使うようになったのである。例えば、日本の今後を担う若手女性作家川上弘美の『センセイの鞆』が2008年に中国語で翻訳出版されたとき、宣伝のためだったのだろうが、「21世紀の『ノルウェイの森』」とのキャッチコピーが付されて売り出されるということもあった。

さらに、中国の映画界にも音楽界にも『ノルウェイの森』の影響を見ることが出来る。香港の有名な映画監督王家衛による『恋する惑星』（中国語の原題：『重慶森林』）は、よく村上春樹の作品の影響を受けていると言

われている。大陸で「水晶湖」（Crystal Lake）という若いバンドのCD（2006年）が売り出されたが、表紙に書かれた「村上春樹のファンが逃すべきでないCD」という言葉からも分かるように、彼らの音楽は村上春樹の影響を直に受けたものであった。これも、商売のため『ノルウェイの森』を利用した例と考えていいだろう。

おわりに

村上春樹の『ノルウェイの森』は、最初1989年に翻訳刊行されたときには、そのタイトルさえ十分に知られていなかったが、およそ20年後の現在では90パーセントの若者がその名を知るようになった。これは、出版社や訳者の努力、図書館のサービス、マスコミの宣伝など様々な外部要因によるものとも考えられるが、『ノルウェイの森』の作品自身が魅力的な内容を持っていて、そのことを理解した中国の読者から大きな共鳴を得た結果でもあった。

『ノルウェイの森』の作中の永沢は、「死後三十年を経ていない作家の本は原則として手にとろうとはしなかった」³¹というふうに、村上春樹を代弁するとも思われる言葉を残していたが、この長編が発表された1987年から20年以上が経つ今日、村上春樹自身は中国におけるこの間の『ノルウェイの森』ブームをどのように受け止めているのだろうか、興味のあることである。というのも、村上春樹はフランツ・カフカ賞の授賞式の記者会見で、「ノーベル賞については誰からも何も聞いていません。ここで言うのは申し訳ないが、賞には関心がない。読者が私にとっての賞です」³²と話している。村上春樹自身が「賞」と思っている読者の心理や感情は、時代や社会の変化に伴って変わる。そのことを考えれば、20年前に初めて翻訳出版されて今日まで人気を保っている『ノルウェイの森』が、将来の中国でどう受け止められるか、誰にもはっきり言うことができない。しかし、先の調査で、「あなたは今後も村上春樹の作品を読みますか」という質問に対して、これまで村上春樹を読んだことのある若者（学生）は、48パーセントが「はい」と答え、8パーセントが「いいえ」と答え、44パーセントが「決めていない」と答えている。一度も村上春樹の作品を読んだことのない若者（学生）のうち、「今後読みたい」と答えた人は37パーセントで、「読みたくない」が11パーセント、「決めていない」が52パーセントである。このことと読んだことのある若者（学生）のアンケート結果と重ね合わせると、今後も「村上春樹熱」（『ノルウェイの森』ブーム）はしばらく続くのではないかと

予測されるが、果たしてどうなるだろうか。

注

- 1 『世界は村上春樹をどう読むか』(柴田元幸・藤井省三・沼野充義・四方田犬彦 編集 2006年10月20日 文芸春秋刊)は、日本国際交流基金の企画で2006年3月に開かれた「17カ国・23人の翻訳者、出版者、作家が一堂に会し、熱く語り合った画期的なシンポジウム」(帯文の言葉)という報告書である。
- 2 Yahoo!辞書「新語探検」より、<http://dic.yahoo.co.jp/newword?category=2&pagenum=111&ref=1&index=2005000027>
- 3 北京、上海、南京、武漢、長沙、西安、済南、青島、大連、瀋陽、包頭(内モンゴル)の11都市。
- 4 北京大学、清華大学、北京外国語大学、中央民族大学、上海外国語大学、上海財経大学、上海交通大学、南京師範大学、武漢大学、中国地質大学(武漢キャンパス)、湖南大学、陝西師範大学、山東大学、山東師範大学、済南大学、中国海洋大学、青島科技大学、大連外国語学院、大連工業大学、遼寧大学、内モンゴル科技大学、包頭師範学院などの22校。
- 5 1952年生。現在中国海洋大学外国語学院教授。『ノルウェイの森』『海辺のカフカ』などの村上春樹の25作品を翻訳。『ノルウェイの森』などの作品が大陸部で知られるにつれ、翻訳家としての名が広く知られるようになった。他にも夏目漱石や芥川竜之介、川端康成、井上靖、東山魁夷などの作品を翻訳している。(「チャイナネット」2008年7月21日)
- 6 中国の「情報時報」(2007/7)より
- 7 林少華Blog((2007-07-02 10:57:59) http://blog.sina.com.cn/s/blog_48f36ce001000aw9.htmlより
- 8 「中国的“村上春樹熱”『ノルウェイの森』100万部突破」(2004年11月22日 読売新聞)
- 9 日本で特に中国を指している称。(『広辞苑』 岩波書店 第五版)
- 10 『ノルウェイの森』①(講談社1989年6月15日)P.258
- 11 閉ざされた殻から姿をあらわして…『ノルウェイの森』とベストセラーの構造(桜井哲夫 『村上春樹スタディーズ05』 栗坪良樹 柘植光彦編 若草書房 1999.10)
- 12 『ノルウェイの森』①(講談社1989年4月5日)P.198
- 13 『文学界』2006年 第六十卷 第六号
- 14 『ノルウェイの森』①P241(講談社1989年4月5日)
- 15 NUCB journal of language culture and communica-

tion Vol.6, No.2 (20041100) pp. 55-71

- 16 『村上春樹 河合隼雄に会いに行く』(岩波書店 1998年2月16日) P12-14の「コミットメントの問題について」
- 17 『ノルウェイの森』①P88(講談社1989年4月5日)
- 18 『ノルウェイの森』①P89(講談社1989年4月5日)
- 19 『ノルウェイの森』①P101(講談社1989年4月5日)
- 20 『ノルウェイの森』①P101(講談社1989年4月5日)
- 21 『ノルウェイの森』①P46(講談社1989年4月5日)
- 22 1978年から1980年にかけて中国の文壇で主導的地位を占めた文学思潮である。その名は盧新華の「文革」中の知識青年の生活を題材にした短篇小説「傷痕」に由来する。「四人組」失脚後、思想解放の叫びの高まりに伴って、文学創作において、真实性の地位が次第に回復されていった。そういった歴史的背景のもとで、傷痕文学の作者たちは、醒めた、誠実な態度で、生活の真実に関心を寄せ、思考し、痛みをとまなう悲惨な歴史を直視し、作品のなかに十年の災害における生活の光景を体現した。「文化大革命」を徹底的に否定すること、それが傷痕文学の精神的精髓であった。(『文藝学新概念辞典』文化藝術出版社1990)
- 23 「中国の村上春樹—“新鮮血液”」田建新(『村上春樹スタディーズ05』に収録 栗坪良樹 柘植光彦編 若草書房 1999.10)
- 24 《读书》(2006年第11期)。原題:消費社会転型中の“村上現象”—村上春樹文学在中国大陆的翻译与接受
- 25 原題:《夜晩的承諾》(1997年 江蘇文芸出版社刊行)。
- 26 中国で1970年代に生まれた作家を指す。
- 27 原題:《滴涙痣》(2004年9月 作家出版社刊行)。
- 28 2003年3月に敦煌文芸出版社刊行。
- 29 2006年11月23日刊。
- 30 2006年9月に作家出版社刊行。
- 31 『村上春樹全作品1979～1989 ⑥ ノルウェイの森』P48(講談社1991年3月20日)
- 32 「カフカ賞に『光栄です』—村上春樹さんプラハで会見」(共同通信社 2006年10月30日配信)

主要参考文献一覧

1. 『ノルウェイの森』①(講談社刊1989年4月5日)
2. 『ノルウェイの森』①(講談社刊1989年6月15日)
3. 『村上春樹全作品1979～1989』(講談社1991年3月)

- 刊)
4. 『村上春樹スタディーズ 05』(栗坪良樹 柘植光彦 編 若草書房 1999年10月)
 5. 『世界は村上春樹をどう読むか』(柴田元幸・藤井省三・沼野充義・四方田犬彦 編集 文芸春秋刊 2006年10月20日)
 6. 『村上春樹のなかの中国』(藤井省三著 朝日新聞社刊 2007年7月10日)
 7. 『村上春樹—「喪失」の物語から「転換」の物語へ 付・中国における村上春樹の受容(王海藍)』(黒古一夫著 勉誠出版刊 2007年10月)
 8. 『村上春樹 河合隼雄に会いに行く』(河合隼雄 村上春樹著 岩波書店刊 1998年2月16日)
 9. 『文学界』(文芸春秋発刊 2005年の第3号, 2006年の第6号)
 10. 『読書』(中国の文芸月刊誌 2006年の第11期)
 11. 『文藝学新概念辞典』(文化藝術出版社 1990年)
 12. 林少華のブログ
<http://blog.sina.com.cn/linshaohua>
- (平成20年9月30日受付)
(平成20年12月15日採録)

a-図1

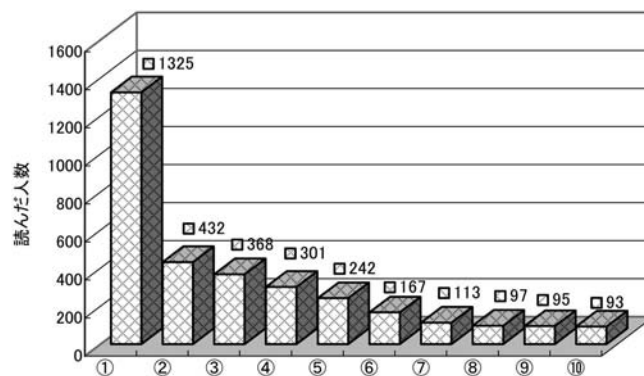


図1 中国の読者が読んだ村上春樹作品 (上位10作品)

① ノルウェイの森	⑥ 羊をめぐる冒険
② 海辺のカフカ	⑦ 中国行きのスロウ・ボート
③ 風の歌を聴け	⑧ アフターダーク
④ ダンス・ダンス・ダンス	⑨ パン屋再襲撃
⑤ 4月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて	⑩ 国境の南、太陽の西

b-図2

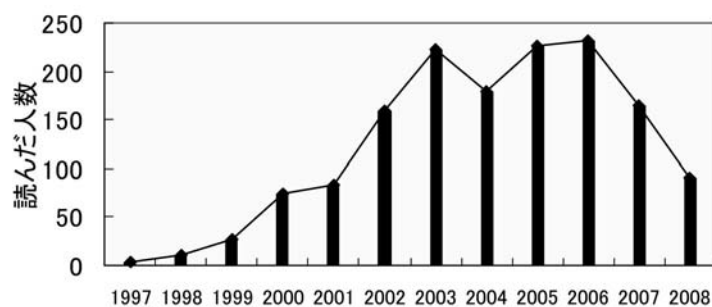


図2 始めて村上春樹を読んだ年別の分布状況

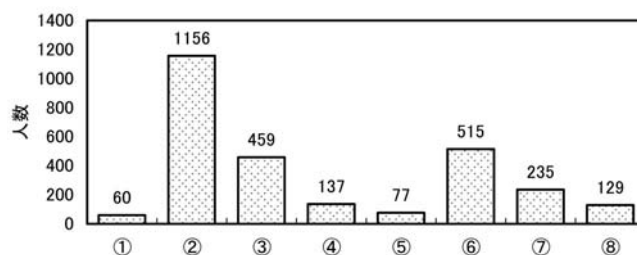
c-表1

表1 中国の大陸で流通している『ノルウェイの森』の中国語版

番号	中国語の書名	翻訳者	出版地	出版社	出版時間
1	挪威的森林	黄琪汶	台北	故郷出版社	1989
2	挪威的森林	林少華	桂林	漓江出版社	1989.7 (初版)

3	挪威的森林: 告别処女世界	鍾宏傑、 馬述禎	ハルピン	北方文芸出版社	1990
4	挪威的森林	林少華	ハルピン	北方文芸出版社	1990
5	挪威的森林	葉蕙	香港	博益出版公司	1991
6	挪威的森林	林少華	桂林	漓江出版社	1996 (改版)
7	挪威的森林	頼明珠	台北	時報文化出版公司	1997
8	挪威的森林	頼明珠	蘭州	敦煌文芸出版社	1999
9	挪威的森林	林少華	西寧	青海人民出版社	2000
10	挪威的森林	頼明珠	蘭州	敦煌文芸出版社	2000. 1
11	挪威的森林	林少華	厦門	海峽出版社	2000. 4
12	挪威的森林	林少華	ハルピン	北方文芸出版社	2000. 8
13	挪威的森林 (全訳本)	林少華	上海	上海訳文出版社	2001
14	挪威的森林	張斌	フフホト	内モンゴル人民出版社	2001
15	挪威的森林 (全訳本)	亦夢	長春	時代文芸出版社	2001
16	挪威的森林	安娜	フフホト	遠方出版社	2001
17	挪威的森林	魯平	桂林	漓江出版社	2001
18	挪威的森林	南楠	桂林	廣西師範大學出版社	2001. 9
19	挪威的森林	李季	北京	西苑出版社	2003
20	挪威的森林	(不詳)	北京	文化芸術出版社	2004. 6.
21	挪威的森林 (全訳記念版)	林少華	上海	上海訳文出版社	2007

d-図3



- ① 安易な恋愛小説である
- ② 孤独と喪失感に満ちている
- ③ 社会システムや共同体を冷やかに傍観している
- ④ 日本というより、欧米のスタイルを持って、日本文学の伝統的な特徴がない
- ⑤ 多くの作品には深みがなく、カノン（古典）にならない
- ⑥ 大量に性描写がある
- ⑦ 原作にも訳本にも言葉が簡潔で、流暢であり、ユーモアとを感じる
- ⑧ その他

図3 村上春樹の作品から得られた印象